

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

テストでも「教える」

タイトルを見て、驚かれたことと思います。テストは学習の定着を確かめるために行います。当然、自力で取り組むものだというのが一般的な解釈です。

確かにその通りなのですが、テストも学ぶ機会、学力形成の場と考えると、「テストでも教える」という発想で指導ができます。

テストは「点数」ではありません。「心」です。以下に、私が普段実践していることを紹介します。

1 見直しヒント

「見直さない」とアドバイスしても、なかなかそうしないものです。そこで、きっかけを作ります。

Q1

子どもが見直しをするために、どんな働きかけをしますか。

- ① 口頭で「見直しましょう」と意識付け、板書する。
- ② ヒントを板書する。
- ③ 誤答が予想される問題番号を板書する。

①のように呼びかけ、それに応えてくれるのなら苦勞はしません。しかしテストに集中すると、教師の声は耳に入りません。

そこで、板書をしてみます。しかしその瞬間は意識しても、いつの間にか板書の存在を忘れてしまいます。

③は、見直すきっかけにはなりません。子ども

は板書を見て、最初に難しい問題に取り組んだり、後回しにしたりします。問題に「☆」マークを付け、慎重を期す子どももいます。しかし、正解かどうかわかりません。

そもそも子どもは正解だと思って解答しているのに、間違いが「見えません」。おそらく、自分は正しい、自分の非を認めたくないという心理が働くのでしょう。

一問目を見直して、「間違いない」と確信すると、二問目からは「おそらく正解だろう」という安心感が生じてきます。

しかも、見直しがだんだん面倒になってきます。その結果、やる気も下がってしまいます。

②なら「確かめてみよう」「合っているかな」という気になります。

例えば、算数の計算の答えが「321」だったとします。このとき板書するヒントは「6」です。つまり、正解の「321」のそれぞれの



数字を足した数字をヒントとします。

正しいと思って書いた解答をいくら見直しても、子どもは間違いに気づきません。そこで、気づかせるためにヒントを出すのです。

ヒントには条件があります。それは「簡単」だということです。複雑だと、理解するのに時間がかかってしまいます。

算数なら前記のように正解の和にしたり、国語なら、「5文字」と字数を示したり、「最初の言葉は『あ』と言葉を指定したりします。

「ヒント」で自分の解答を見直し、合っていれば安心感を得られ、次の解答も見直そうという気になります。

反対に、合っていないと、「あれ?」「何で?」と立ち止まり、再考しようとしています。

2 見直したくなる机間指導

テストの間、教師は机間指導をしています。

Q2

子どもが見直したくなる机間指導はどれでしょうか。

- ① 「間違いがあるよ」と声にして教える。
- ② 間違っている解答を指でトントンと教える。
- ③ 正解に赤丸を付ける。

①では、子どもは「どこが間違っているのだろう」と見直します。

ところが、間違った箇所がわかりません。教師がそれを示していないからです。

しかも、子どもは正しいと思って解答して

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

いるので、全て正解に思っています。
また、答えに確信をもてない場合、それが迷いに変わり、せっかくの正解を書き直してしまう場合もあります。

その点、②なら誤答がどれかわかります。ただ、指で指摘されただけの箇所は、すぐに記憶から消えてしまいます。誤答が一つなら覚えていられますが、数が多いと、先生がどこを「トントン」してくれただのか忘れてしまうでしょう。

③だと、どこを見直せばよいか明確です。「赤丸」は「一の川（一列目）」、「二の川（二列目）」、「三の川（三列目）」という順に付けて行きます。

しかし、これでは子どもたちの間に差が出てきます。最初に見る「一の川」の子どもは二三問しか見てもえませんが、「三の川」の子どもはそれより多くの問題を見てもらえることになるからです。

そこで、二巡目は「三の川」から赤丸を付けます。こうすると、「一の川」の子どもが最後に、不公平感がなくなります。

誤答には「×」を付けません。誤答は見直し、書き直して欲しいからです。そこに、「×」があると解答を書くスペースがなくなります。

なお、選択問題には赤丸を付けません。選んだ選択肢が誤答だとわかれば、残りのものの中から正解を探そうとします。これでは、子どもが「考えた」解答になりません。

誤答を教えることも正解に赤丸を付ける事もどちらも見直しを促しますが、「×」よりも「○」をもらったほうがうれしいものです。

「×」は意気消沈しますが、「○」は励みになります。「よし、見直して他の問題も『○』をもらおう」という向上心が湧いてきます。

これではテストにならないのではないかとお叱りを受けそうです。テストは習熟度を測るものだから、間違いも大切な結果だという意見もあると思います。

しかし、テストも授業の一環です。「テストでも指導」と捉えます。

3 テスト直し

見直しも終わり、答案用紙を全て埋められたので、子どもは答案用紙を教卓に提出します。

Q3 このあと、先生はどうしますか。

①テストの教科以外の自習を指示する。

②その場で採点する。

早く終わった子どもは時間が余ります。しかし、テストが終わらない友達がいまいます。静かに過ごす必要があります。

そこで、①のように教師は読書・ドリル・プリントなどの課題を出します。これが一般的だと思います。

しかし本稿は「テストでも教える」です。テストを提出した後もテスト直しをしてもらいたいのです。そこで、②のようにその場で採点します。満点なら、「満点。おめでとう」、そうでない時は、「惜しい。教科書を持って、図書室」と答案用紙を手渡します。



図書室が空いていない場合は廊下です。とにかく、教室以外の場所でテスト直しをします。教室ではテストに取り組んでいる子どもがいるからです。

教室を出て行く子どもたちはテストが終わったばかりなので、新鮮な気持ちで誤答に向き合え、正解が載っている教科書を真剣に開きます。この時ほど教科書のありがたみを感じる時はないでしょう。

テスト直しをすると、友達に、「合っている?」と確認します。間違っている時は、友達が教えてくれます。